



# ファインスチール

Summer 2024

夏



## CONTENTS

### 01 特集1

地域と集合住宅のかかわり  
**柳小路ハイツ**

### 05 特集2

第74回  
**全国建築板金業者 岡山大会**

### 07 ファインスチールを使った 建築設計例 348

**ROOF HOUSE**

内と外を繋ぐ

設計：玉田 誠 + 脇本 夏子 / 玉田脇本建築設計事務所

### 11 建築めぐり

ウォートルス伝 32 丸山雅子

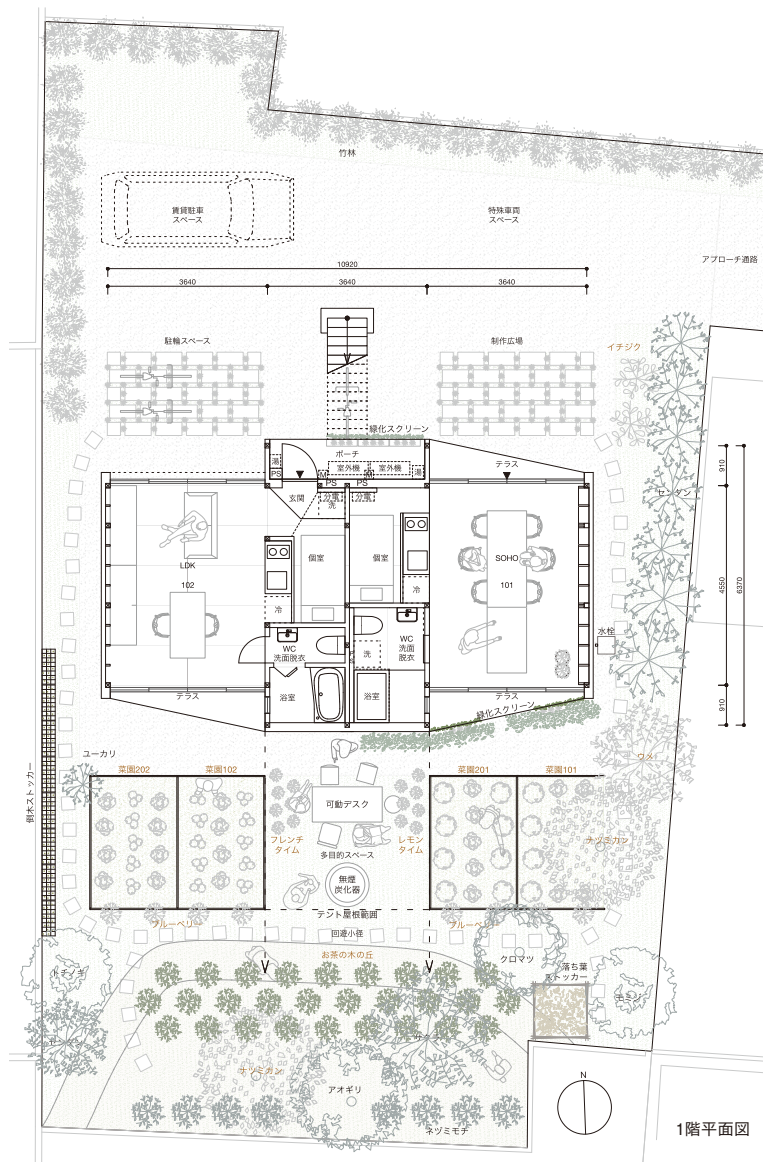
### 13 街でみかけるファインスチールの施工例 その56

# 地域と集合住宅のかかわり 柳小路ハイツ

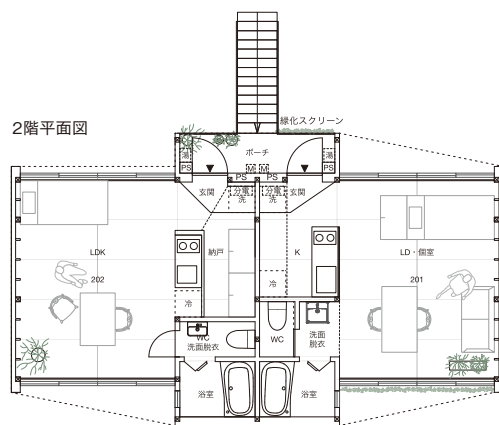
設計：TAKIBI（柄内 秋彦 + 佐藤 季代）

今回の特集1では、神奈川県藤沢市の共同住宅「柳小路ハイツ」を紹介します。コロナ禍において、職・住・農が近接する暮らしを目指して開発した菜園付き集合住宅のプロタイプとして今後の発展が期待されています。

2019年春号掲載の「日光の家」を設計された柄内秋彦先生と佐藤季代先生(TAKIBI)が設計を担当されました。



緑豊かな郊外の住宅街にある敷地の環境条件を分析し、太陽光と卓越風を室内に最大限取り込みながら、自然環境と屋内外が一体化するような建物形態を検討した。その結果、水回り+構造コアを納めた「閉じた箱」の両側に、南北に抜けのある「筒状の空間」を配置することによって、設計者のSOHOを含む4戸の明快な住空間を生み出した。



北側俯瞰。南側に江の島が見える。



南側外観。今は生えそろうた緑化カーテンと庇で南側の厳しい日射を遮っている。

これら3つのボリュームは屋根勾配や内外の仕上げに変化をつけることで視覚的に分節し、周辺の低層戸建住宅群に馴染ませている。また屋根・壁の外断熱構法と外壁の窯業系サイディングを組み合わせることによって高性能な外皮を形成し、延焼ライン内の柱・間柱・梁・外装下地合板の構造体の現を可能にした。間柱は本棚として活用している。間仕切りや造作は住人がライフスタイルに応じて家具やカーテン等で自由に編集するというコンセプトで、こうした更新を住人でもある設計者がバックアップする体制が賃貸システムに組み込まれている。環境制御の手法としては日射制御や雨水の自然放流、設備機器の目隠しを兼ねた緑化ワイヤースクリーン等のパッシブかつセルフビルド可能なローテクな方法を採用した。



北側俯瞰。3つのボリュームがはっきりと分かる。



201号室。



202号室。



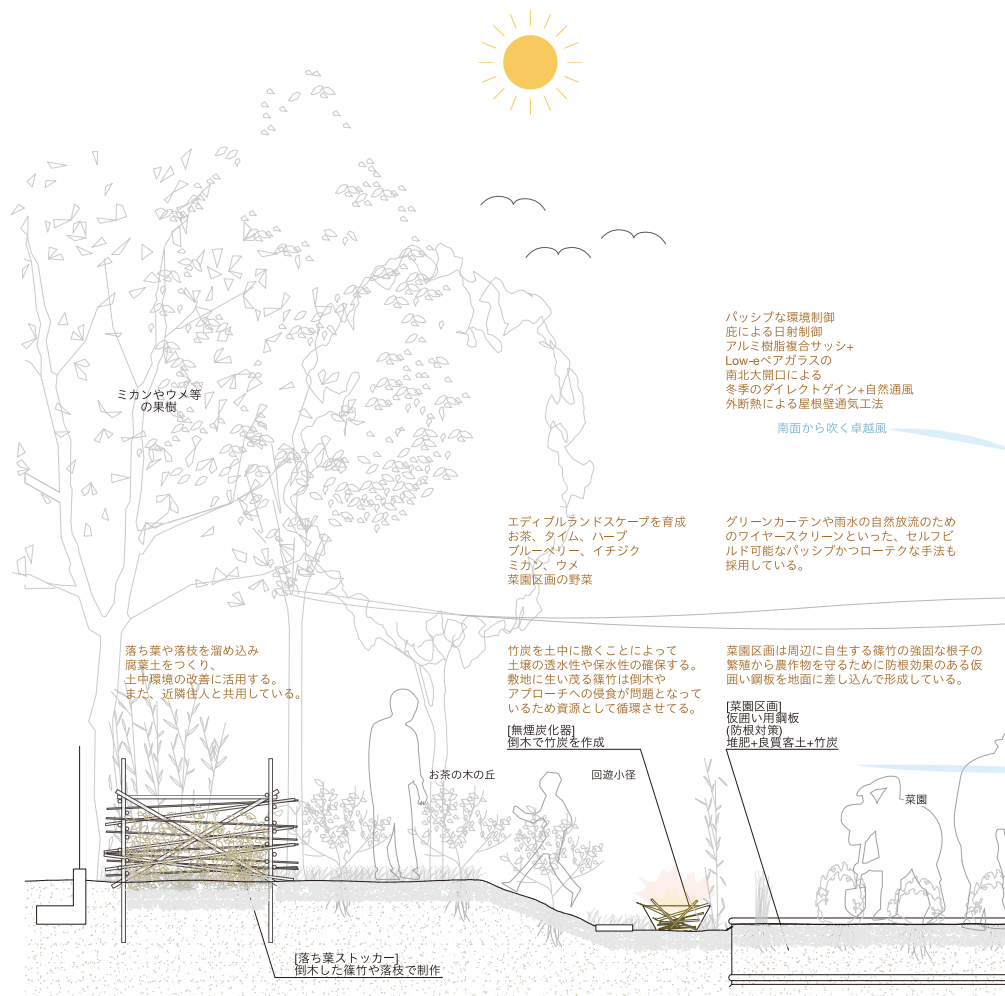
SOHOとして使用する101号室。



102号室。

敷地内に自生する果樹に加え、農家と共同で住人用の菜園区画やエディブル・ランドスケープを形成すると共に、お茶の苗木を定期的に植え込むことによって、収穫・体験ワークショップを開催している。また、敷地内で倒木した篠竹を有効利用するために、無煙炭化器で竹炭化して散布したり、近隣と共用の落葉ストッカーを作成して腐葉土を醸成することによって、土中環境の改善と循環に取り組んでいる。こうした試みを通して、住人のみならず周辺地域における住と農の近い関係性を模索するための拠点となることを目指したい。このように敷地全体を環境共生の“場”として更新し続ける試みを通して、別の敷地における同形式の集合住宅シリーズの展開も視野に入れている。

設計 建築：枅内秋彦+佐藤季代/TAKiBI  
 構造・設備：TAKiBI  
 敷地面積：407.93㎡  
 建築面積：57.16㎡  
 延床面積：108.53㎡  
 階数：地上2階  
 構造：木造  
 主要用途：共同住宅  
 住戸数：4戸  
 住宅専用面積：26.5㎡  
 工期：2021年3月~9月  
 撮影：P1-2/藤井浩司，P3-4/TAKiBI



香港の建築大学の学生とのワークショップ。リジェネラティブ実践などの体験を行なった。



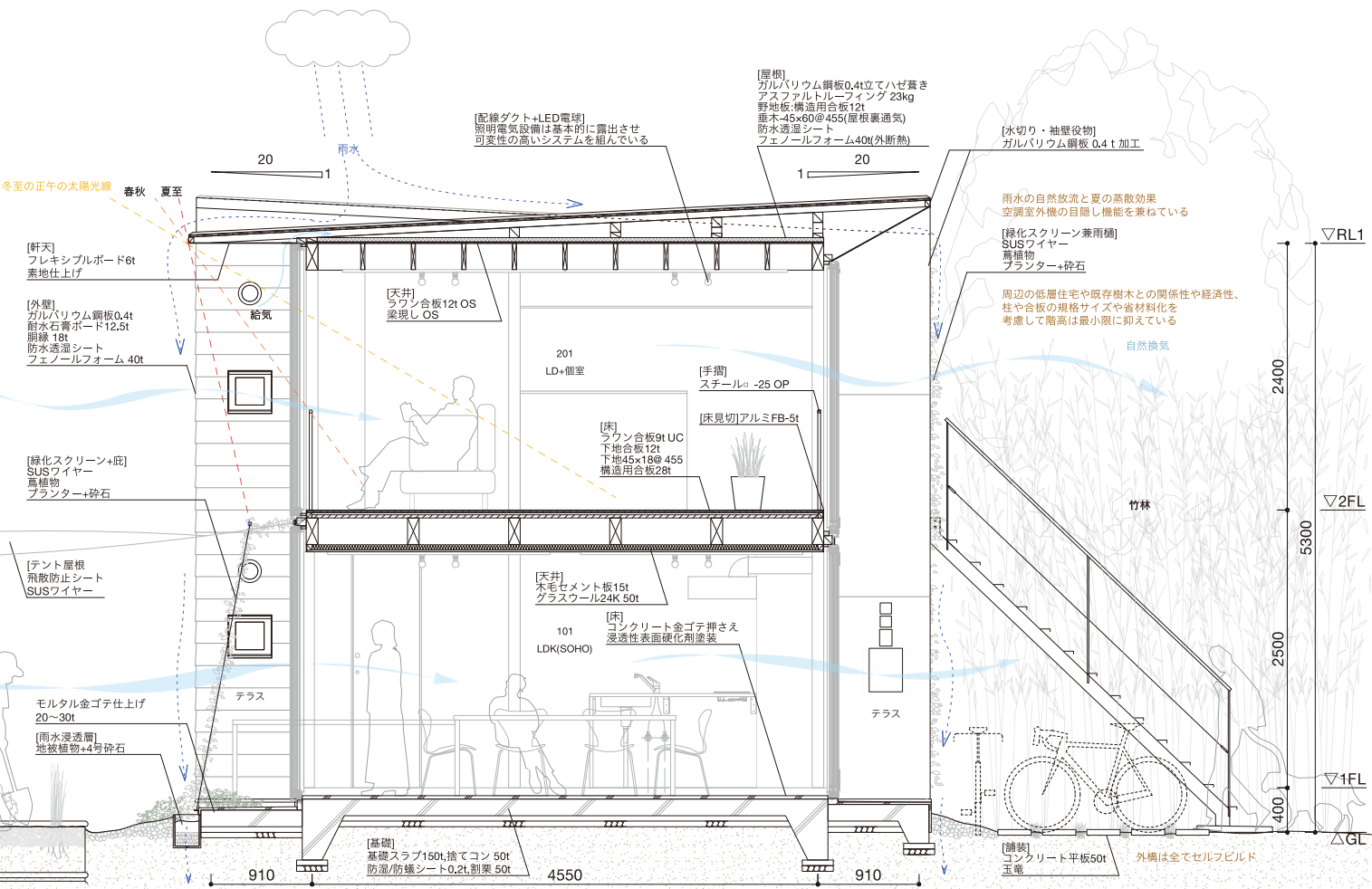
提携する茶園と開催したお茶の収穫、焙煎、試飲ワークショップ。



飛散防止シートでつくったテント屋根。  
 FineSteel 03



住人に割り当てられた菜園。



自生するミカンの木から収穫。



無煙炭化器で炭を製作し、菜園の土中環境を改善し循環させる。



落ち葉を溜め込んで腐葉土をつくり、菜園の土中環境を改善。



広域ダイアグラム。

# 第74回 全国建築板金業者 岡山大会



板金ハサミ  
8月3日は建築板金の日

## 〈主催〉

全日本板金工業組合連合会  
一般社団法人 日本建築板金協会

## 〈開催日〉

令和6年5月29日(水) 前夜祭  
令和6年5月30日(木) 本大会  
於：ジップアリーナ岡山(岡山県総合グラウンド 体育館)



石破茂議連会長が流通協ブースに来訪されました! 「耐震性能比較模型」を用いて、重い屋根と軽い屋根の地震時の揺れ方の違いについて、理解を深めていただきました。



テープカット

第74回全国建築板金業者岡山大会が、令和6年5月30日に岡山市北区の「ジップアリーナ岡山」で開催された。困難な時代を乗り越えたと誓った東京大会から1年。新たな章を開き、山積する様々な課題に強く立ち向かうための74回大会に約2,300名が参加。



流通協展示ブース風景（「遮熱塗料効果体感模型」と屋根のミニチュア模型も展示）

第74回の総合テーマは

**「希望と熱意**

**組織で築く建築板金の未来」**

コロナ禍前への歩みが進む中、能登半島の大地震で年が明け、被災地を中心に困難な局面を強いられている。2024年働き方改革を迎え、建築板金業界においても、優れた技能労働者や次世代の担い手確保のための行動が求められる。優れた技能・技術の継承と安定した経営環境の確立を強く説き、若手育成により重みを置いた方策を進めていくことが肝要となる。岡山大会は46組合のすべてで大会開催を実現した大きな節目の大会となった。



国歌斉唱



「2024 Miss SAKE 岡山」の小野愛理佐さんがお出迎え



大盛況の展示会場



満員の岡山大会会場



伊原木隆太岡山県知事もご多忙の中参加



第75回の開催は島根県に決定



ホテルグランヴィア岡山で行われた前夜祭は、天野宏昌全日本板金工業組合連合会理事長の挨拶があり、石破茂衆議院議員（建築板金業振興議員連盟会長）、逢沢一郎衆議院議員、石井正弘参議院議員の来賓祝辞、黒田茂JFE鋼板社長の乾杯の音頭にて開宴された。



うらじゃ（演：岡山うらじゃ連 四季）



天野宏昌 全板連理事長



川口清文 全板連副理事長



石破茂 議連会長



逢沢一郎 衆議院議員



石井正弘 参議院議員



黒田茂 JFE鋼板社長

ファインスチール  
を使った  
建築  
設計例

348

# ROOF HOUSE

つな  
内と外を繋ぐ

設計：玉田 誠 + 脇本 夏子 / 玉田脇本建築設計事務所



(撮影：写真はすべて、長谷川健太氏撮影©)

今回紹介する「ROOF HOUSE」は栃木県南部にある。かつて採石業を中心に中世から栄えた土地で街道の宿場町もあった、古(いにしえ)から続く地域だ。現在は東武線や幹線道路などの交通網が整備され、近くには開発住宅地も点在する地方都市の郊外である。また県内には陶磁器、木材を使用した木工品、草木染の染織物など、伝統工芸品をはじめとしたものづくりが盛んな地域でもある。

「ROOF HOUSE」を設計したのは玉田誠氏と脇本夏子氏である。施主夫妻とは学生時代からの友人で、この住宅の設計を依頼された。家族構成

は施主夫婦と2歳の双子の計4人。施主は仕事の関係で県外から当地に来た。当初は駅前のマンションの購入を検討していたが、自然豊かな地域に魅力を感じて2年間理想の土地を探した結果、現在の田園風景の広がる小高い丘の麓の敷地に家を建てることとした。

## 敷地と周辺状況

対象地は市街化区域内の第一種住居地域にあり、東面が幅員5mの公道と接している。敷地はおよそ2,000㎡で道路に接する宅地部分が

約995㎡、道路面からみると奥に広がる雑木林が約940㎡という広さだ。雑木林には桜の木をはじめとした大きな広葉樹や、前所有者が祀っていた祠もあり、歴史が感じられる土地である。敷地の前には農地が広がり、周辺には地場産業を支える町工場が点在する。遠くには採石場で有名な岩山を見ることもできる。

## 空間構成と住宅

### ■設計のコンセプト

「ROOF HOUSE」は大変ユニークな空間構成だ。施主からは趣味を





南西側外観。3つの棟を大屋根が覆う。



北側遠景。かつて採石が盛んな地域であったことがうかがえる。

活かしつつ周辺の人々を呼び込める場所、海外生活の長かった妻からは東南アジア的な生活への憧れとして「庭に住みたい」という思い、そして将来の転勤に備えて他人に貸せるような計画という要望があった。

こうした施主の要望に対して

- ①庭に住むことの提案：庭と住居が一体となったような環境
- ②多様な活動の場の提供：必要なものは自分たちで作ることが出来るような空間
- ③専用住宅ではない住宅の計画：一般的な住宅の間取りではなく施主家族が様々な活動にチャレンジできる住空間をコンセプトとした。

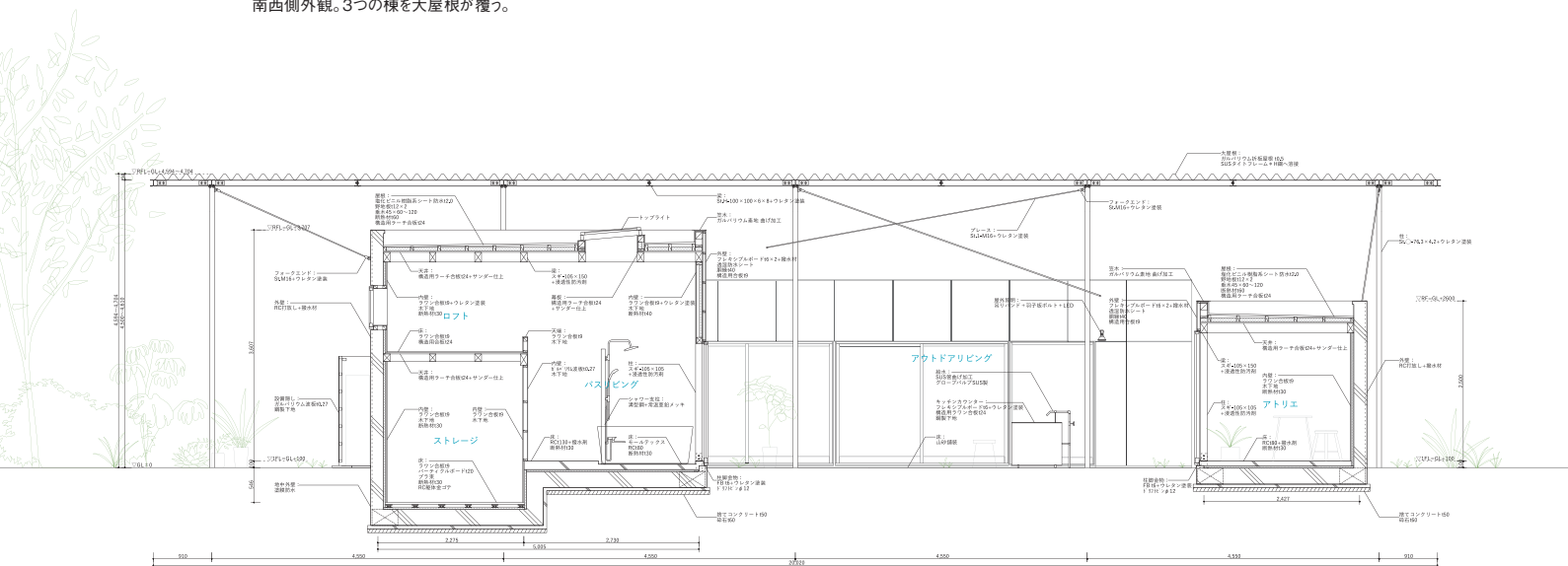
ヒントにしたのは周辺に現存する農家住宅だった。庭を中心に母屋や

農小屋など複数の建物が建てられた空間構成に着目して、ベッドスペースやリビングのある棟、浴室のあるバスリビング棟、多様な使い方ができるアトリエ棟の3つの棟からなる分棟住宅とした。これらの3棟はニワを取り囲むように配置され、その上に住宅全体を覆う大屋根を設けた。

#### ■ 四つの空間

分棟住宅に大屋根を設けることにより「ROOF HOUSE」の建つ敷地全体に四つの空間が創出された。それは「屋内」「半屋内」「半屋外」「屋外」だ。

**屋内：**屋内はベッドスペースやキッチンのある空間とバスリビングのロフトのように外部からの視線が届きにくい空間である。



断面詳細図



リビングからキッチン方向を見る。内壁のガルバリウム鋼板波板が屋外の雰囲気を引き込んでいる。

**半屋内:** 屋内に繋がる領域であり、リビングやバスルーム、アトリエのニワに面する開口部は、外部との境界を感じさせることがない開放的な造りとなっており、半屋内空間のイメージが伝わる。

**半屋外:** ニワをはじめとした、大屋根によって守られた外部空間である。

**屋外:** 大屋根に覆われていない、敷地全体である。

しかしながら、このような四つの空間には明確な境界はなく、時間や季節、生活環境の変化によりその性質が変化することも特筆すべきことである。「ROOF HOUSE」はこのような曖昧さにより、空間の繋がりの感じることのできる住宅なのであろう。

#### ■ 素材を愉しむ

「ROOF HOUSE」は外観写真からもわかるように、とてもシンプルなデザインだ。しかし今回のインタビューを通して玉田・脇本氏の建築材の魅力の引き出し方による独特な空間の繋がりが見えてきた。

#### ー ガルバリウム鋼板 ー

この住宅は大屋根にガルバリウム鋼板折板が使用されているだけではなく、キッチンやリビングといった室内空間の壁にもガルバリウム鋼板波板が使用されている。外部に使用する素材を室内空間にも使用することで「屋内」と「屋外」を素材でつなげることがを意図したという。

また大屋根については大スパンを一枚で飛ばせる、材として折板材を使用しているが、大屋根の端部の切り方を工夫することで、雨水が屋根からそのまま流れ落ちることを防いでいる。室内の壁については波板を釘打ちしたシンプルな納まりだが、上下のクリアランスをゼロとすることで緊張感のある納まりとしている。同じ建築材を「屋内」と「屋外」で使うこと、使う空間に応じて形状と施工方法を変えること、一つの材料の性質を丁寧に理解することの重要性を実感した。

ー ホームセンターで購入できる材料 ー  
もう一つ興味深いことはホームセン

ターで購入できる材料で照明や家具などを制作していることだ。キッチンのレンジフードの吊棚は電気配管とワイヤーメッシュを組み合わせたもの、雨樋受金物と設備機器用金物を使ったスポットライトをつくるなど、自由な発想によりオリジナルテイ溢れる住空間がつけられている。

さらに、施主自ら農業用パイプを使って屋外収納棚を施工した。このように建築家に触発されて施主自身も生活環境をつくり上げることは、建築というものを生活者自身が身近に感じることのできる機会ではないだろうか。そしてそのような施主の生活の変化や時代の変化により自らの手で手を加えていくことを、玉田・脇本氏は「建主の手で施工されることで、営みと共に、住まいが常に更新されて生き生きとした状態」であるという。

#### ー 自然との繋がりに ー

最後に「素材」と言っても建築素材ではなく「自然」という素材を上手に生活環境に取り入れていれていること

も「ROOF HOUSE」の魅力だろう。分棟の配置は雑木林に向かって開口部が向くように計画されている。その正面には古くからある桜の木があり、春には花見を楽しめるという。また雑木林のメンテナンスで伐採した樹木は薪ストーブの薪として利用しているという。このように自然との繋がりも大切にしつつ、「ROOF HOUSE」が建てられる以前からある土地の素材を利用することも、素材を上手に使っていると言えるのではないだろうか。



二ワからバスリビングを見る。左右の棟をつなぐサンルームは廊下であり路地でもある。

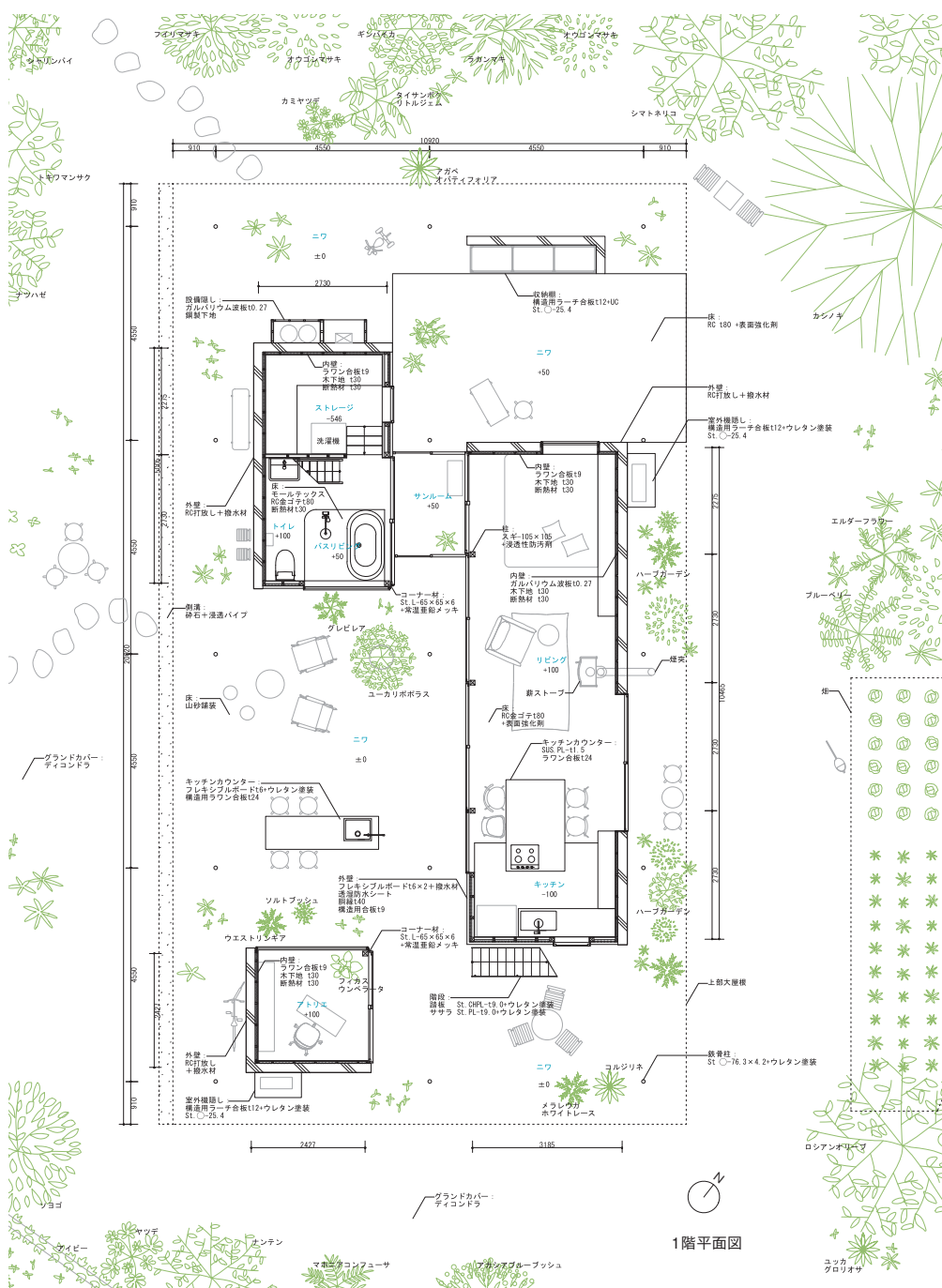
## ガルバリウム鋼板の魅力

玉田・脇本氏によるガルバリウム鋼板の建築素材としての評価は高く、軽量であることや耐候性だけではなくさまざまなディテールに対応できるという。

今回の「ROOF HOUSE」での使用例からその汎用性の高さがうかがえ、『内外に混ざり合う住まいの魅力』の一つとしてガルバリウム鋼板の可能性を再確認できたのではないだろうか。

最後に玉田・脇本氏は「住むということを多様化したい。住まいにはそこに住む人の生活を豊かにする可能性があり、それは住むということに対して、必要に応じて拡張していくことで実現するのではないか。「ROOF HOUSE」でいえば、庭と住空間が一体となることで住むことの可能性は広がり、食事する空間も子どもの遊ぶ空間もすべてがシームレスにつながっていけると思う。また自分で手を加えていくことで家は進化し、その進化する時々で、生活の断面が繋がってみえる」と話してくれた。

土地の歴史と繋がり、地域の人々と繋がり、家族の成長が繋がるシームレスな空間として住み続けられていく住宅として「ROOF HOUSE」の未来も見てみたいと思う作品である。



設計：玉田脇本建築設計事務所／玉田 誠 + 脇本 夏子

一級建築士事務所 玉田脇本建築設計事務所／〔横浜〕〒222-0011 神奈川県横浜市港北区菊名2丁目18-26 [阿蘇] 〒869-1411 熊本県阿蘇郡南阿蘇村

[e-mail] info@twk-architects.jp [URL] https://www.twk-architects.jp/

レポーター：東京大学 大月研究室 深見 かほり

## ウォートルス伝<sup>32</sup>

# シェリダンビル

藤森研究室

担当 丸山 <sup>もとこ</sup> 雅子

コロラドには、ウォートルス兄弟がかつて所有し、事務所を開設していた建物が、当時の面影のまま残されている。それは、デンバーのユニオン駅の真向かいに、東京にたとえるなら丸ビルの位置に立っている。

この建物が最初に建てられたのは1883年のことである。1883年8月、Denver Street Railway Companyに「street car stable」の建築許可がおりた。ウインクープ通りと17番通りの角地に、レンガ造四階建ての厩舎および発着所を建てるというもので、規模はウインクープ通りに面して100フィート、17番通りに面して125フィートで、総工費は5000ドル、工事期間は90日を予定していた。当時の路面鉄道は馬が牽引する馬車鉄道だったため、厩舎が必要だったのだ。この建物は、デンバーの一部の路線を除くほぼすべての路面鉄道の路線の発着所として使用されていた(注1)。

1886年には増築が行われた。その規模は、ウインクープ通り沿いに59フィート、奥行きは125フィートで総工費は3万ドルだった。1階は発着所と新しい事務所として使用され、従来の事務所は待合室として使われることになった。2階と3階は約200の馬房に分割され、上層階に莫大な重量がかかるため、鉄と石を多用した非常に頑丈な建物が建設された(注2)。

1889年には、Denver City Cable Railway Company (Denver Street Railway Companyの後継会社)が少し離れた場所に、発電所を備えた新社屋を建てた(注3)。すでに路面鉄道は馬力からケーブル・パワーに切り替えられており、厩舎は必要ではなくなっていた。路線を拡大するための資金も必要だったため、古い車庫兼厩舎は売却されることになった。

そこで登場するのがアーネスト・ウォートルスである。1891年8月、この車庫兼厩舎がアーネストに売却されることが報じられた(注4)。また同月、アーネストが長兄のトーマスと共にデンバーに事務所を構える予定であることも報じられた(注5)。以前に書いたように、トーマスは妻子を連れて7月にサンフランシスコに到着している(本誌2023年春号)。

1891年8月30日の夜、建物から馬車鉄道の車両が撤去され(注6)、9月8日にはついに建物がアーネストに14万ドルで売却された(注7)。

翌年1月19日、アーネストに改築の建築許可が下りた。規模は17番通りに面して125フィート、ウインクープ通りに面して150フィートで総工費は4万ドル、工事期間は90日を予定していた(注8)。そのころまでに、この一画はシェリダンブロック(Sheridan block)として周知されるようになり、改築後の建物の名称は「シェリダンビル(Sheridan Building)」になることが報じられた(注9)。

アーネストは、この古い元厩舎と寂れた一角を、立派なビジネス活動の中心にするために、進取の気性を発揮し、資金を惜しまず投入した。彼は、電力を必要とする様々な軽工業とビジネスをひとつ屋根の下に集めることを考えた。そのために、地下に強力なエンジンを設けて、各テナントに電力と照明を供給するようにした。これは製造業

の盛んな大都市では一般的になっていたが、デンバーでは新しかったという(注10)。また、電力と照明を自家発電でまかなうだけでなく、スチームで全館暖房し、地下600mの地下水脈から水を引き込み給水し、外部からの供給を一切必要としない建物を計画した。同様な建物は、当時サンフランシスコに2棟しかなかったという(注11)。

工事は順調に進んでいたが、入居目前の5月17日に火災が発生し、7000ドルから8000ドルの被害を出した(注12)。予定は遅れて、1892年7月27日にシェリダンビルのお披露目が行われた。すっかり新しい外観に誰もが見違えたという。改修費は約8万5000ドルに上った(注13)。(図1、2)



図1 シェリダンビル  
17番通りの正面。改築工事がほぼ完成した時の姿。この後火災に遭い、開業は遅れた。  
出典:『The Rocky Mountain News』1892年4月10日, 5頁。



図2 シェリダンビル  
ユニオン駅からウインクープ通り越しに見たシェリダンビル。  
出典:『The Rocky Mountain News』1892年11月27日, 13頁。

「Nothing could be more complete, and as leases expire at other places every available space in this monster structure will resound with the hum of machinery (これほど設備の整った建物はないだろう。他の場所で賃貸契約が満了するたび、このモンスター・ビルの空室は機械音で満たされるだろう)」と建物は高く評価された。設計を担当したバアレスン兄弟(Baerresen Bros.)についても、「車庫から宮殿を作った(to make a palace out of a car shed)」として並外れた才能が称えられた。

17番通り沿いの正面は全て取り壊され、1階部分は溶岩石、残りは赤い圧縮レンガ張りの近代的な装いの建物が完成した。基礎は堅固に作られ、内部は重厚な壁に鋼鉄と錬鉄の桁で再構築された。

一階には、大手の鉱業機械製造販売会社、旅行者にランチを提供することもできる食料品店、エレガントな喫茶店などが入居した。喫茶店で使われる食器類は全てカットグラスと輸入陶磁器で、本物のセーブルやロイヤルウースターなどの価値の高い骨董品もあった。エントランスロビーには、フランスのパリのサロンで人気のパネルが飾られ、葉巻売り場、客用の美しい化粧室などが備えられていた。

カフェの高級感あふれる雰囲気や、絵画やエッチングなどの芸術作品に惹かれて、女性客が夫に連れられて訪れることが珍しくなかった。ユニオン駅の真向かいという立地から、旅行者や上流階級のビジネスマンにとって好都合の場所となった。

二階には、写真製版所(本誌2024年春号)、出版社、デンバー周辺の印刷用インクの大部分を供給するインクと印刷用ローラーの製造工場が入居した。ウォートルス兄弟の事務所も2階に設けられた。アンティーク・オーク材で装飾された、紳士用客間風の一続きの長い三部屋からなっていた。三階にはニューヨーク以西で最大のメッキ専用工場、仕事着の縫製工場、製錬会社の事務所などが、四階には、電気工業社(図3)、印刷工場、シカゴ以西で唯一のアスベスト製造工場などが入居した。(注14)

1242

H. H. METCALF, President.      H. W. LAWRENCE, Manager.  
J. RUSSELL KNOWLAND, Secy. and Treas.

THE

# Columbian Electrical Works

COMPANY.

Manufacturers of

## SUPPLIES & SPECIALTIES

EXPERIMENTAL and REPAIR WORK a Specialty.

OFFICE, FACTORY AND SALESROOM:

### 1629 Seventeenth St., Sheridan Building.

Supplies of Every Description.

図3 The Columbian Electrical Worksの広告(1893年)  
 シェリダンビルに入居した電気工業社の広告。シェリダンビルに、「OFFICE, FACTORY, AND SALESROOM」(事務所、工場、売場)が置かれていたことがわかる。  
 出典:『Denver City Directory for 1993』1893年, 1442頁。

また、この建物は、デンバーの重要なイベントに使用されることがあった。1892年8月に開催された第25回コンクラーベでは、全米各地からテンプル騎士団がデンバーに集まり、そのレセプションのためにシェリダンビル内のいくつかの部屋が使用された(注15)。1893年のシカゴ万国博覧会の準備にあたっては、事務所がシェリダンビル内に設けられ、州内各地から集められた展示品の倉庫として使われた。そしてシカゴに搬送される前に、展示品を一目見ようと、多くの人々がシェリダンビルを訪れた(注16)。

ところが1893年5月、アーネストが突然この世を去る。建物は開業して一年足らずで主を失い、しばらくは誰のものとも言えない状況にあった。変化がみられるのは1898年秋のことで、このときは長兄のトーマスも亡くなっていた。アーネストの遺産を巡り在英の姉妹たちとの間でもめていたが、1898年10月に次兄のアルバートがアーネストの遺言執行者となり(注17)、シェリダンビルを含むアーネストが遺した不動産を1899年2月に競売にかけることが決まった(注18)。

しかし、競売はすんなりとは決まらず、1901年11月に鉱業機械製造販売会社のヘンドリー&ボルトオフ社(Hendrie & Bolthoff Manufacturing & Supply Co., 以下H&B社と略す)が落札したが、横やりが入ってさらにもめ、1902年1月ようやくH&B社の主張が認められ決着がついた(注19)。

H&B社の所有となった建物は、1909年に増築が行われた。同年7月に下りた建築許可によると、既存の建物に隣接して、ウィンクープ通り沿いに75フィート、奥行き110フィートの4階建てを、総工費1万5000ドルで建てるという内容だった(注20)。これで建物は、現在と同じ、17番通りに面して125フィート、ウィンクープ通りに面して225フィートの規模になった。

建物はH&B社に70年間使用された後、開発業者に売却された。1981年、開発業者は、建物をオフィスと住戸に改築し、「Sheridan Heritage Building」と名付けると発表したが(注21)、計画は頓挫

した。1992年に別会社の手に渡り、新会社は1993年から94年にかけて900万ドルをかけて、1階は店舗、2階以上は住戸に改築し今日に至る。現在の名称は「Streetcar Stables Lofts」という(注22)。(図4)



図4 旧シェリダンビル(2000年筆者撮影)  
 現在の名称は「Streetcar Stables Lofts」という。「Denver City Railway Company Building」という名称で文化財に登録されているが、路面鉄道会社が所有していたころの建物(1883~1891年)とは外観も規模も用途も異なる。この建物のルーツはシェリダンビル(1892~1901年)にある。

さて、この建物は「Denver City Railway Company Building」という名称で、アメリカ国家歴史登録財(National Register of Historic Places)に登録されている。登録時の資料を読むと、その重要性について以下の点が挙げられている(注23)。

- 1883年から1892年頃まで、デンバー初の公共大量輸送システムの主要ターミナルだった
- 1902年から1972年までコロラド大手の鉱業機械製造販売会社H&B社の本社だった
- ロウアー・ダウントウンで最も印象的な商業建築の一つである
- 規模と立地の良さが建物の重要性を高めている
- 外観は、デンバーの著名な建築家ベアレッセン兄弟による1892年頃の改築である

しかしこの資料に、アーネストの名は出てこない。この建物を車庫兼厩舎から最新設備を備えた近代的な商工業ビルに生まれ変わったのはアーネストであり、シェリダンビルこそ現在の建物の原型であるにもかかわらず、アーネストの功績やシェリダンビル革新性について言及されていないのは残念である。

(注)

- 1 『The Rocky Mountain News』1883年9月5日, 3頁。
- 2 『The Rocky Mountain News』1886年12月26日, 6頁。
- 3 『The Rocky Mountain News』1889年1月3日, 9頁, 同6月3日, 4頁。
- 4 『The Rocky Mountain News』1891年8月12日, 8頁, 同8月18日, 5頁。
- 5 『Telluride Republican』1891年8月21日, 2頁。
- 6 『The Rocky Mountain News』1891年8月31日, 2頁。
- 7 『The Rocky Mountain News』1891年9月9日, 3頁。
- 8 『Denver Buildings Permits File』第1巻, 104頁。
- 9 『The Rocky Mountain News』1892年1月17日, 14頁。同1月26日, 8頁, 同1月31日, 5頁。
- 10 前掲資料
- 11 『The Rocky Mountain News』1892年2月17日, 3頁。
- 12 『The Colorado Daily Chieftain』1892年5月18日, 1頁, 『The Rocky Mountain News』1892年5月19日, 8頁。
- 13 『The Rocky Mountain News』1892年7月28日, 3頁。
- 14 竣工当時のシェリダンビルについては、前掲資料および『The Rocky Mountain News』1892年11月27日, 13頁を参考にした。
- 15 『The Rocky Mountain News』1892年6月24日, 8頁, 7月29日, 8頁。
- 16 『The Rocky Mountain News』1892年10月7日, 4頁, 同10月8日, 3頁, 同11月18日, 8頁, 同12月10日, 4頁, 同12月14日, 5頁, 同1893年1月21日, 4頁, 同1月23日, 8頁, 同1月29日, 11頁, 同5月23日, 4頁。
- 17 『The Rocky Mountain News』1898年10月18日, 4頁。
- 18 『The Rocky Mountain News』1899年1月18日, 9頁。
- 19 『The Rocky Mountain News』1901年11月28日, 5頁, 同1902年1月7日, 14頁, 同1月17日, 14頁, 『Denver Times』1902年1月17日。
- 20 『The Rocky Mountain News』1909年7月10日, 9頁。
- 21 『The Rocky Mountain News』1981年9月25日, 88頁。
- 22 Thomas J. Noel 『Buildings of Colorado』1997年, 67頁。
- 23 旧シェリダンビルがアメリカ国家歴史登録財に登録されたときの資料はweb上に公開されている。  
<https://npgallery.nps.gov/GetAsset/248584e4-f62c-4673-a504-d34c42263ee9>

# 街でみかける ファインスチールの施工例 その56



## 宮古製糖株式会社 多良間村多良間製糖工場

「宮古製糖株式会社」は1959年、農家所得向上を理念とする製糖工場として発足。1974年に「宮多製糖株式会社」との工場合併により新たなスタートを切った多良間工場は、2018年11月「多良間村多良間製糖工場」として竣工し、同年12月から操業開始。宮古の海に映える緑青折板屋根が特徴的な近代設備を誇る大型工場として1日当り250トンのさとうきび原料から30トンの黒糖製造が可能。農家と共に歩んできた50年余りの道のりを、未来永劫継承していく。





写真提供：株式会社神戸製鋼所ラグビーセンター

## 2 コベルコ神戸スティーラーズ 灘浜グラウンド クラブハウス

2019年、灘浜グラウンドのクラブハウス増改築のプロジェクトが立ち上がり、2020年9月に着工。2021年6月末に竣工し2021年8月、外壁にブラックシルバーの塗装ガルバリウム鋼板を採用し、「コベルコ神戸スティーラーズ」の力強さをイメージさせる『鉄の塊』を表現した新しいクラブハウス（神戸市東灘区）が誕生した。

新クラブハウスは、延べ床面積約2,730㎡と従来の3倍の広さ。チームの力強さが表現された斬新なデザインで、地上2階の建屋の間には、グラウンドにつながるコリドーを配置し、日常から戦いへと選手たちの気持ちの切り替えに呼応する。また、コリドーを核に、コミュニケーション空間を展開。屋内練習場や疲労回復を促すリカバリー水槽なども完備し、機能性にも優れている。

この場所から「コベルコ神戸スティーラーズ」の新たな歴史がはじまる。



写真提供：株式会社神戸製鋼所ラグビーセンター

グラウンド側外観



写真提供：株式会社神戸製鋼所ラグビーセンター

トレーニングルーム

# FINE STEEL!

ボクらは  
「自在に変化」  
進化した鉄!

ボクらは「自在に変化」進化した鉄!

ファインスチールは、鉄の長所を最大限に活かしながら、これからの家と暮らしにふさわしい特長を合わせ持つ、現代建築の最適な素材として注目を集めています。新しい住まいで始まる暮らしをより良いものに。ファインスチールが理想のカタチを実現します。

ボクらの  
特長

地震につよい 表面がきれい 環境にやさしい

屋根材・壁材には **ファインスチール**



全国ファインスチール流通協議会

<http://www.zenkoku-fs.com>

